

HANDS 事業

—継承と刷新—

宇都宮大学国際学部 立花 有希

宇都宮大学国際学部 スエヨシ アナ

宇都宮大学国際学部 申 恵 媛

1 HANDSの新たな一歩

2022年4月、多文化公共圏センターが新たな一歩を踏み出すのと同時に、HANDS（外国人児童生徒教育支援）事業も大きな転換点を迎えた。それまでHANDSを牽引されてきた田巻松雄先生が定年を迎えられ、代表の交代と相成ったのである。田巻前代表は、12年間（現在のHANDSに連なる研究事業を含めれば18年間）にわたり、立ち上げから組織づくり、活動の発展に尽力され、まさしくHANDSの顔であった。そこから代表を引き継ぐのは荷が重い、次の代表につなぐことが自分の役割と考えれば、責任を全うできそうな気がした。その意識に至った背景には、多文化公共圏センター改革ワーキンググループの一員として、センターの課題と今後の方向性について議論を重ねたことが影響している。それまでセンターの活動は人的にも内容的にも一部に集中する傾向があったが、それを開かれたものに変えていくことが志向された。同時に、研究・教育・社会貢献の相互の関連づけとその成果の発信とを意識的に行っていくことがセンターの特徴であり、存在意義であると確認された。それに照らせば、HANDS事業もそれに関わる人々や活動内容の幅を広げつつ、研究・教育・社会貢献の有機的連関を深めていくことが目標となる。一方で、センターの事業を多方面に拡大していくとなれば、HANDS事業の相対的な存在価値が変わっていくことは必至である。そのなかで、これまでの活動をこれまでと同じ予算とやり方で続け

ていくことは難しい。とはいえ、単に縮減するだけでは、魅力や活力もしぼんでしまう。いかにしてHANDSの良さを残しつつ、新しい形に変えていくか。センターの一事業に値するものであり続けるためにも、研究・教育・社会貢献の相乗的な推進をより強く意識しつつ、新しい関係者と発想を加えていくことが目下の課題となっている。

そうして始まった新体制での初年度、さっそく心強い新メンバーを得た。着任されたばかりの申恵媛・国際学部助教である。申先生は、小学5年生のときに来日された「元・外国人児童」で、日本におけるエスニック・タウンの研究を専門とされており、しかも学生主体の地域社会とつながる活動に関心をお持ちだという。こんな願ってもないことがあるのかとその巡り合わせに驚き、感謝するばかりであった。実際に活動を共にしてみると、前職で培われた運営能力はもとより、その柔らかな人柄と細やかな心配りで、早くもHANDSに欠かせない存在となっている。個人的には、学習支援の帰りの最終バスを二人して逃しても、困惑するより先に自分たちのへまを大笑いする愉快なコンビの誕生を心から喜んでいるところである。

さて、こうした背景のもとで展開してきた今年度の活動から、ここでは3つについて報告することにしたい。

①外国人児童生徒教育支援のための学生ボランティア派遣

学生ボランティア派遣については、依然とし

て感染症拡大への警戒感が残る中で、様子を見ながらの再開となっており、県内の3校への派遣にとどまった。その中の1校に赴いた際、日本では話者の少ないある言語を母語とする留学生の派遣を大変喜んでいただいたが、支援対象の生徒に対する指導状況をうかがっていると、求められているのはやさしい日本語による支援なのではないかと考えさせられた。また、派遣を始めたものの、交通アクセス面での困難から実際には十分に期待に応えることができない結果となった。交通アクセス面での困難とは、単に距離や便数に関する問題だけではなく、留学生にとっては、バスの行先表示がわかりにくく、確実に往復できるか、遅延の際に代替ルートをとれるかという不安の方が大きいようであった。日本人学生にサポートについてもらう二人体制を試みたものの、それには日程調整を複雑にするという難点があった。派遣数が少ない今だからこそ、一つ一つの事例を丹念に検証し、学生の柔軟な発想や小中学校の先生方の要望を引き出しながら、派遣学生にとっても、支援を希望する学校にとっても、実り多い活動にしていきたい。

②多言語による高校進学ガイダンス

2022年9月11日、大学会館で「多言語による高校進学ガイダンス」を開催した。5家族の参加があり、それぞれ学校関係者と通訳を配した言語別テーブルに分かれて、高校進学に関する情報提供と個別の相談内容への対応を行った。近年、実施していなかった体験談発表を復活させ、二人の国際学部生に「外国人児童生徒」としての経験と大学進学に至る歩みについて語ってもらった。あるテーブルの通訳担当者から、「発言は保護者の方からばかりで、本人は連れてこられて来たという感じだったのが、体験談発表が始まると身を乗り出して話を聞いていた。その後は、本人からも質問が出た。あの子にとって、先輩の話は大きな刺激になったと思

う」という報告があった。そこに、こうしたイベントを大学が主催することの意味の一つを見出せた気がして、ありがたかった。ちなみに、この報告をしてくれたのは、留学生として国際学部で学んだ卒業生で、そうだからこその気づきであったとすれば、なお一層の励みになる。こうした現在および過去の国際学部の教育活動に関わる有形無形の財産を生かすと同時に、その価値を再確認する機会としても、ガイダンスを位置づけていくことができるかもしれない。

③外国人児童生徒教育推進協議会

外国人児童生徒教育推進協議会は、栃木県教育委員会、県内9市2町の教育委員会、外国人児童生徒教育拠点校となっている小中学校の代表が集って、情報共有、意見交換を行う場である。近年は、年2回の開催となっており、今年度の第1回は、2022年9月22日にUUプラザで開催された。内容については、「第12回栃木県外国人生徒進路状況調査」の結果報告と外国人児童生徒の保護者との協力のあり方に関する意見交換の2つを中心に構成した。現場の声を聞くことのできる貴重な機会ではあるが、その具体的な目的が明確に共有されていないことが課題となっている。これだけの方々に集まっていたからには、何らかの形で共同の成果を上げる必要があるのではないか。その具体案について、検討しているところである。なお、第2回の協議会は、2023年1月30日にオンラインで開催予定となっている（本稿執筆時）。

以上、本年度の活動を振り返ってみると、一定の達成感を得ると同時に、改めて課題の多さ、大きさに気づかされた。意見交換を重ね、知恵を絞り、わくわくするような解決策を着想したい。

(立花 有希)

2 真岡市国際交流協会(MIA)・継承スペイン語教室Amauta・HANDS 事業の連携

真岡市における継承スペイン語教室であるAmautaは、真岡市国際交流協会（Moka International Association-MIA）の支援の下、その地域に集住しているペルー出身の保護者のイニシアチブで2012年7月に設立された。その目的は、彼らの子どものアイデンティティの維持である。ボランティアである保護者たちは、スペイン語教室だけではなく、ペルーの歴史・伝統行事の祝い事（独立記念日、クリスマス）、スペイン語の読書サークル、スペイン語の歌、スペイン語での遊びも行っている。その中で、保護者たちの「vacaciones útiles（充実した夏休み/有意義な夏休み）」という依頼に応じ、2013年7月26日から宇都宮大学国際学部の多文化公共圏センター（Center for the Multicultural Public Sphere-CMPS）のHANDS 事業は、Amautaの場を利用して、ペルーにルーツを持つ生徒の「夏休みの宿題」の学習支援を行ってきた。毎年7月下旬から8月上旬の間に5回程度18:30から20:30まで宇都宮大学生（そのほとんどが国際学部学生）は、HANDS Jr.のメンバーとして、20-40名程度の生徒に夏休みの宿題の支援を実施する。生徒のほとんどはペルー人であるが、他のスペイン語圏の外国人生徒、日本国籍を持つ参加者もある。参加者は小学校1年生から中学校3年生まで幅広い年齢であり、数学・国語・理科などいろいろな教科の学習のサポートをしている。真岡市国際交流協会によると、コロナ禍のため2020-2021年には中止となったが、Amautaは直近10年間で、180名以上の協力で850名以上のペルーのルーツを持つ小中学生が、その指導の恩恵を受けた。

地域との連携によるトリプル・ウィンの達成

真岡市に住んでいる外国人の中では南米系が最も多く、その数は4割以上になり、ブラジル人に次いで、ペルー人が多く暮らしている。ま

た、ペルー国籍の外国人住民・自治体から支援を受けた組織・高等教育機関の間のトライアングルな連携というのは、ほとんど前例がなく、スペイン語圏の外国人と地域の連携としては、唯一と言ってよい事例になっている。それは、真岡市国際交流協会にペルー出身のコーディネーター兼通訳者・翻訳者が勤めていることや、真岡市におけるペルー人移民の歴史は長く、その多くが集住しており、多数のペルー住民がその地域にある工場で働き、強い繋がりがあるコミュニティを形成したことが要因として挙げられる。

真岡市ポータルサイトのオープンデータによると、最近10年間の外国人登録人口は、4.5%の増加に留まっている。ブラジル人は、10年前は全体の31.7%だったが、25.9%に減少した。一方、ペルー人は、同期間、常に2割程度を占め、ほとんど減少していない。そのトライアングルな連携の結果、トリプル・ウィンを達成することが出来ているためであろうか。Amautaは、外国人と日本人の交流を創出するという目的を掲げながら活動してきた。一方、宇都宮大学は、教育方針として「3C精神」（主体的に挑戦するChallenge、自らを変えるChange、社会に貢献するContribution）を目標に掲げている。HANDS Jr.の活動は、この「3C精神」を大いに発揮してきたと言え、ウィンの関係が出来上がっている。

Amautaという単語の発音は、日本語のローマ字の発音と一緒に、今までHANDS事業に参加している学生は、容易にAmautaを発音してきた。だが、これはスペイン語ではなく、南米のアンデス山脈に住んでいる先住民のケチュア語で、「知識・知恵を伝える人（Amawta）」を意味する単語である。文字を使用していなかったインカ帝国では、Amautaの役割が大きく、様々な「知」を伝えていた。外国のルーツ・経験を持つ学生が少なくない宇都宮大学生は、生徒に「夏休みの宿題」を手伝うだけでなく、自分

の経験を生かし、世代的に近い先輩として、日本でより良い生活ができるように、様々な意味で「生きる知識を伝える人」になっている。

「Amauta」 = 「生きる知識を伝える人」

四季感覚を持つ日本人は、時期によって、自然・行事・食べ物など楽しめるが、外国人は育った環境が違うため、同じ感覚を持っているわけではなく、特に日本にいるペルー人は、ペルーの海岸地域の出身が多く、その地域は海に近いが砂漠に囲まれている。そのような地域では、雨季と乾季がなく、1年を通して激しく気温が変わる日本とは異なり、気候も風景もあまり変わらない。そのような状況の中、「夏休みの宿題」の教科書には、夏と関係があるイラスト・文章・例文・詩などが記載されている。ペルーにルーツを持つ生徒の中には、日本に住んでいても、日本人と同じような四季感覚がない子どもがよくいる。彼らは家庭でスペイン語しか話さず、ペルー出身の親からペルーの限られた文化しか受け継がれていない場合も多い。子どもは下校してから、親が仕事から帰るのを待つ。日本語能力によっては、学校で同級生と交流することは可能であるが、日本語能力が低い生徒は、特別な日本語教室へ移動させられ、学校を通じての日本社会との触れ合いが少なくなる。さらに、親は出稼ぎ者として、一時的に来日しているという意識のもと、いつか母国に帰国するという考えがあるため、仕事を優先している。そのため、勤務時間は一般的に長い。その結果、子どもと過ごす時間は少なくなる。親は週末に1日休みを取るが、その日は子どもとの団らんよりは、家事、日用品と食料品の買い物、外食などが中心となる傾向がある。

「夏休みの宿題」には夏の花の定番である朝顔が中心となっている文章がよく記載されている。朝顔は、夏を感じさせる例としてよく用いられるが、ペルーにルーツを持つ生徒は、朝顔を見たことがないか、見たことはあっても花の

名前とイメージを結びつけられない場合がある。そのため、彼らは問題の意図を正確に捉えることができず、夏のイメージである朝顔についての文章の意味を正確に理解することができない。そのような状況に直面した場合、HANDS Jr.の学生たちは、スマートフォンを利用し、朝顔の写真を見せ夏の風物詩であることを説明してから、「夏休みの宿題」の解答を導く。

蝉とひまわり

数年前、ペルー出身の一人の小学生の男の子を担当した際、「夏休みの宿題」の中に、家の近くや登下校中に観察したことについて書くという課題があった。日本語能力が不十分であったその男の子は、教科書の課題に対して関心があまり無く、「家の近くや登下校中には何も見ていない」という回答をした。彼は登下校以外では外出せずに、部屋の窓から路上をずっと眺めていたようだ。学校では、どのぐらい他の児童との交流があったかはわからないが、日本語能力が低かったため、おそらくあまり交流をしていなかったと予想される。来日してから楽しんでいるところを見たことがなく、当然、今まで関心を寄せるものがあまりなかったのである。

「夏休みの宿題」の課題を済ませなければならなかったので、夏について感じていたことを繰り返し聞いてみたところ、やっと何かを思い出した顔をした。少し怯えたような顔をしながら、夏になると町で「ミンミン」という変な音が聞こえると教えてくれた。男の子は、蝉の声を聞き気になったそうであるが、どこからきた何の音かわからなかったため、少し怖かったようである。その経験があったからこそ、その子とコミュニケーションをとることができる「窓」が開いていたのである。スマートフォンで検索した画像を見ながら、蝉の説明を受け、自分の周りにあるものを初めて把握したのだ。

同じ日に男の子は、登下校中に茎が長い花畑を見たことがあることも思い出した。色と形に

ついでと聞いてみたところ、それはひまわりだった。来日前ひまわりについて聞いたことはあったが、直接見たことがなく、もちろん日本語でもその花の名がわからなかった。ひまわりはスペイン語では「girasol」と言い、太陽に向かって咲くことを意味しており、日本語でのひまわり（向日葵）も似たような意味であることを説明した。すると男の子は初めてスペイン語と日本語の間の共通点を感じていたようだ。同時に自分の周りの物事を把握でき、母国と日本との距離が短くなったように感じていたのではないか。男の子と最初の課題の「蝉」によってコミュニケーションをとることができ、次の課題の「ひまわり」へと糸で繋がっているように、コミュニケーションが続いていった。

HANDS 事業・HANDS Jr.に所属している学生・大学院生は、Amautaに参加しているペルーのルーツを持つ児童生徒と一緒に「夏休みの宿題」に取り組む。しかし、学生たちの貢献は、「夏休みの宿題」を完成させることだけにとどまらない。多くのHANDS Jr.の学生たちは、自身も外国にルーツを持ち、同じような経験をしていることから、日本で生きるための「知を伝える人」となっている。経験が少ないことから視野が狭くなってしまっているペルーの子どもたちは、「夏休みの宿題」がきっかけで、日本社会へとつながる「窓」を広げる。それは、新しい経験へとつながるチャンスになっている。



写真1 生徒の参加者とAmauta、HANDS、HANDS Jr.の関係者
(2022年7月27日、真岡市国際交流協会のタカハシタカシ氏より)
(スエヨシ アナ)

3 「交流」と「共生」の両輪で

2022年4月に宇都宮大学に着任し、HANDS事業の末席に加えていただけてから早くも一年近くになる。宇都宮大学による外国人児童生徒・外国にルーツをもつ子どもたちの支援については着任以前から見聞きしていただけに、活動の一端に携わることができて感慨深い。本稿は、本年度特に中心的に関わらせていただいた子ども国際理解サマースクール（8月開催）および那珂川町との国際交流イベント（10月開催）の活動報告を兼ねて、おおよそ一年間の感想とさせていたいただきたい。

これら2つのイベントは、HANDS事業の中で「地域のニーズにこたえる活動」として位置づけられる。8月の子ども国際理解サマースクールは宇都宮市と連携して継続的に進められてきたものであり、10月のイベント是那珂川町よりお声がけいただけて開催された。どちらもHANDS Jr.はじめとする本学の学生たちが主体的に準備を進め、地域の方々に見守られるあたたかい雰囲気の中滞りなく終えることができた。

8月の子ども国際理解サマースクールは、宇都宮市東生涯学習センターの主催で、宇都宮市国際交流協会、宇都宮大学と企画運営を連携し、多彩なプログラムを通じて子どもたちの国際理解のきっかけづくりを目指すイベントである。筆者にとってはこちらが初めて参加するHANDSの活動であったため、これまでHANDSの活動を作り上げてこられた先生方や学生諸氏による滞りない進行と充実したコンテンツに目をみはりながら、和気あいあいとした雰囲気を知るところからのスタートとなった。

10月の那珂川町国際交流イベントについては、これまたHANDS Jr.はじめとする本学学生たちが主体となって進めたものではあるが、筆者も準備の段階から関わらせていただいた。当日是那珂川町から関係の皆様方および11名の小中高生が大学会館に集まり、留学生を含む本学

学生たちが準備した発表や各種ゲームを通じて国際社会や世界各国に関する理解を深めた。本学学生にとっても参加学生にとっても貴重な機会をいただいた那珂川町の皆様に感謝申し上げますとともに、短い準備期間にもかかわらず多彩なプログラムを用意し滞りなく進めてくれた学生たちに改めて拍手を送りたい。



写真2 那珂川町との国際交流イベントの様子
(2022年10月8日、筆者撮影)

8月・10月のイベントに関する大まかな報告は以上となるが、今回はせっかく紙面をいただいたので、これら2つの活動に加え、その他にも関わらせていただいたHANDS事業の諸活動も振り返っての所感を以下に記したい。

HANDS事業の様々な活動は、大きくは「多文化共生」のテーマに連なるものといえる。筆者は普段の研究においてどちらかといえばその分析概念としての側面に着目してきたが、「多文化共生」の言葉についてはその規範論的・政策論的な意味合いのほうがより広く知られているのではないだろうか。2000年代に本格化した「多文化共生」政策のインパクトは、それが従来地域の国際化推進における柱となってきた「国際交流」と「国際協力」に連なる第三の柱として位置づけられたことにある。それまでの国際交流という枠内では「外国人を地域社会の構成員ととらえる発想は生まれにくく、また優先順位も低くならざるを得なかった」¹との指

摘もあるように、政策としての「多文化共生」は、生活者・地域住民としての外国人住民を意識し、地域社会の構成員として共に生きていくための条件整備を議論の俎上に載せるという点で大きな意義を有していた。ただ、「多文化共生」の語を冠した取組みにも実質的に「国際交流」的性質をもつものも見られ、日本の「多文化共生」における「多文化」が3F (Fashion, Food, Festival) に還元され、華やかな側面に光が当たる一方、構造的差別や偏見等が覆い隠される状況があることも指摘されてきた²。このような経緯もあり、日本で暮らす外国人(エスニック・マイノリティ)に関する研究に取り組んできた筆者はこれまで、国際交流を主目的とするイベントに対してやや懐疑的な思いを抱いてきたのも事実である。

他方で、この一年間ほどHANDS事業に関わりながら感じたことは、HANDS事業が外国人児童生徒・外国にルーツをもつ子どもたちの支援に軸を置きながら、本稿で報告したような国際交流イベントも提供していることの意義である。先に紹介した竹沢泰子は、「多文化」の3Fへの還元を危惧しながらも、「それらの3Fを積極的に打ち出すイベントを多文化共生の啓発事業と位置づけるなら、幅広い層の日本人の理解を深める上で、ある一定の役割は果たしてきたと考えられる」³と付記している。筆者はこの点に関連して、地域のニーズにこたえる形でこうしたイベントを提供するHANDS事業が、栃木県の国立大学である宇都宮大学による取組みであることが重要な意義をもつと感じている。

令和2年国勢調査の結果によれば、栃木県における外国人比率は1.94%と全国(1.90%)と同程度であるが、外国人数の多い東京

1 山脇啓造, 2011, 「日本における外国人政策の歴史的展開」近藤敦編著『多文化共生政策へのアプローチ』明石書店, p.33.

2 竹沢泰子, 2011, 「序論 移民研究から多文化共生を考える」日本移民学会編『移民研究と多文化共生』御茶水書房, p.5.

3 同上

都（3.44%）、愛知県（3.07%）、大阪府（2.36%）の比率を考えると、高い外国人比率を示す都市の出現が地域的あるいは局所的に進展してきたという状況⁴は現在も続いているように見える。市区町村レベルではより顕著であり、たとえば那珂川町では0.94%と全国平均を下回る一方、筆者が長らく研究で関わってきた東京都新宿区（全国有数の外国人集住地域）の場合、7.79%とさきわめて高い比率を示している。

こうしたなかでは、突出した外国人集住地域と、必ずしもそうとはいえない地域とで、外国人住民の置かれた状況も「多文化共生」実現のための具体的な道筋も異なる可能性が大きい⁵。特に、日常的な生活の範囲内で「日本で生活する外国人」と知り合う、少なくともその存在を認知する機会が相対的に少ない地域においては、竹沢の言及する「多文化共生の啓発事業」的取組みがもつ意義がより大きいと予想される。しかし、その場合に「多文化」の華やかで楽しい側面の紹介にとどまることなく、これらをきっかけに育まれた興味関心を、日本で暮らす外国人との共生に向けた取組みにも引きつけていくことが、「多文化共生の啓発事業」として機能するためには肝要であろう。その点、HANDS事業は外国人児童生徒・外国にルーツをもつ子どもたちの支援（学生ボランティア派遣、多言語による高校進学ガイダンス、外国人児童生徒教育推進協議会など）を主軸としており、HANDS事業で提供した国際交流型活動への参加から生まれた関心を、より実践的な「多文化共生」の取組みへつなげる入口として機能

しやすい。さらに、イベントに参加する子どもたちにとってみれば、地元の国立大学がこうした機会を提供していることは、「日本で暮らす外国人」をより身近な存在として感じるきっかけにもなるだろう。

このことは、イベントに参加する側のみならず、HANDS事業に積極的に協力してくれるHANDS Jr.はじめとする本学学生たちにとっても同様である。子ども国際理解サマースクールや国際交流イベントの準備に関わった学生たちの中には、同時に、学生ボランティア派遣や多言語による高校進学ガイダンスを通じて地域で暮らす外国人児童生徒・外国ルーツの子どもたちの支援に直接携わる者もいる。HANDS事業は教育の面においても、広い間口を設けることで関心の濃淡にかかわらず学生たちに関わるきっかけを提供するとともに、「多文化」の消費に終わってしまうことのないようしっかりと現状を知り、深く考えるための場を同時に用意している。

以上のように、地域のニーズにこたえながら「交流」と「共生」の両輪で進むHANDS事業は、支えが必要な者に「手を差し伸べる」と同時に、社会の構成員が互いに「手と手を取り合う」——「HANDS」という名前の由来でもある——ことができる環境の整備に貢献している。この一年間、そんな風にHANDS事業がもつ意義の一端を実感してきた。

とはいえHANDS事業に関わり始めてまだ一年も満たない身であり、的はずれな内容も多々あったかもしれない。新参者の感想ということでご容赦いただければ幸いである。今後も豊かな知見を携え、地域の方々と連携しながら、研究・教育・地域貢献の三方から「多文化共生」について深く考え、学び、推進するHANDS事業の一員となっていきたい。

（申 恵媛）

4 渡戸一郎, 2006, 「地域社会の構造と空間——移動・移民とエスニシティ」似田貝香門監修『地域社会学講座 第1巻 地域社会学の視座と方法』東信堂, pp.110-130.

5 近年では地域社会の多文化化への対応について、都市部の外国人集住地域の事例にとどまることなく、地方部の実態と求められる施策やサポートについて明確化していくことの必要性が提示されている（徳田剛・二階堂裕子・魁生由美子編著, 2019, 『地方発 外国人住民との地域づくり——多文化共生の現場から』見洋書房）。